

子どもの「見方・考え方を鍛える」視点からの体育授業の構想

－教科観の捉え直し－

石田達一郎（静岡大学教職大学院）

1. 目的

これまでの体育授業は、運動種目の技能上達や体力向上を目的としたものが一般的と思われる。しかしながら、今次の学習指導要領（2018）改訂で、コンテンツ（内容）中心の授業からコンピテンシー（資質・能力）を育成する授業へと大きく足場を転換することが求められた。本研究は、「見方・考え方を鍛える」視点からこれまでの体育授業を問い直し、何をどのように転換していく必要があるのかを検討し、具体的な授業改善の示唆を得ることを目的とした。

2. 研究方法

1) 体育授業の実態把握

H市立N中学校の体育授業を対象に調査した。①生徒が記述した学習カードを分析し、生徒の学習成果の捉えを把握した。②授業中の教師の発言を分析し、授業の目的を捉えた。③S県内45名の教師を対象に質問紙調査を実施し、教師の体育授業観を分析した。

2) 「見方・考え方を鍛える」ことの内実の探究

知識の構造化の視点から、「見方・考え方を鍛える」ことの内実を捉えた。

3) 体育授業の問い直し

「見方・考え方を鍛える」視点から、学習内容と学習過程を問い直した。

4) 授業実践による検証

H市立N中学校第2学年を対象に、「運動の概念や法則」の理解を目的とした授業を構想した。

実践授業を分析し、評価した。①生徒が記述した学習カードを分析し、生徒の「運動に関する概念や法則」の理解の様相を把握した。②授業中の教師の発言の特徴を分析し、教師の指導の意図を捉えた。

3. 結果と考察

1) 体育授業の実態

（生徒）技能の上達を学習成果と認識していると捉えられた。

（教師）技能上達や体力向上を目的に授業を計画し、実施していると捉えられた。

以上から、技能上達や体力向上を目的と捉え、「上手くできるための行い方やコツ」を学習内容として、「どうすればできるだろう」と思考する体育授業の実態が把握された。

2) 「見方・考え方を鍛える」ことの内実の探究

「見方・考え方を鍛える」とは、授業を媒介として、既存の知識構造を変革させることと捉えられた。子どもは、これまでの学習や生活経験から自分なりの「見方・考え方」はできる。しかし、それは曖昧であったり断片的である知識を基にした「見方・考え方」である。教科の特質に沿った鍵概念を軸に学習を行うことで「見方・考え方」は鍛えられ、曖昧な知識が鮮明になり、知識同士が関連づいたりする。知識を洗練させたり統合させていくことで、知識構造が変化し、生きて働く知識を獲得していくことになると考えられた。

3) 体育授業の問い直し

これまで技能上達や体力向上を目的としていた体育授業を、知識構造の変革を目的とした視点から問い直した。体育授業の学習内容の中核は「運動に関する概念や法則」と捉えられた。「運動に関する概念や法則」の理解を深める学習を行うためには、「どうすれば上手くできるか」と練習を繰り返していた授業から、「なぜ上手くできるのか」「どのような原理があるのか」と運動の内実を追究する学習過程が構築されなければならない。また、概念や法則の理解は、鍵となる概念を軸に学習を積み上げることで少しずつ深まっていく。そのため、同じ鍵概念を軸に小中9年間を貫いて学習を続けることができるように、発達段階に応じた理解を積み重ねる教科カリキュラムの構築が必要と考えられた。

4) 授業実践による検証

「ズレをつくる」という鍵概念の理解を深めるバスケットボールの授業を構築し、実践した。

（生徒）目の前で起きた事象に対する解釈は変化しただものの、運動に内在する概念や法則に関する理解は不十分であった。

（教師）生徒に考えさせようとしている発言が多いものの、運動に内在する動きの概念や法則を追究するに至らなかった。

4. 結論

各種目に内在する「運動に関する概念や原則」を教科内容の中核に据え、その理解を深める学習過程を展開させることが、「見方・考え方を鍛える」体育授業と捉えられた。